差し伸べられた手

カプロラクタム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学時代の八幡はクラスカーストの最上位の人物、折本かおりに告白した。

しかし、結果は惨敗。　翌日にはそのことがクラス中に広まる。

このことがきっかけに八幡に対する蔑みやいじめ等の行為が激しくなる。

ある日、八幡がボロボロになったところに……。

そんなことを夢として思い出した八幡は中学時代に知り合った最大の親友、星野逢との関係を幸せに感じつつこれからの高校生活を送っていく。

Ｒ―１５、アンチ・ヘイトタグがありますので、苦手な方は読まないことを推奨します。

目次

プロローグ ―― 1
比企谷八幡は気になり始める ―― 5
二人とも悩みそして動き出す ―― 9
やはり俺のきっかけは間違っている ―― 12
そして雪ノ下雪乃と邂逅する ―― 16
比企谷八幡は深く考える ―― 22
過去の回想で思うことは ―― 29
そして星野逢は想いを固めた ―― 35
そして奉仕部へと突入する。 ―― 42
本音を語り合い、そして自ら変えていく ―― 46

プロローグ

頭の中に響いてくる音があった。
それはある時は怖くて……またある時は優しい。　そんな不思議な音。
何度も響いてくる。　まるで俺を呼んでいるかのように。
俺の中に響いてくる優しい音は全てをゆだねたくなるくらい甘美なもののように聞こえる。　何故だろうか。
何も思い出せない。　ていうか、ここはどこだ？
あぁ、そうか。　ここは夢なのかな。
時々、ここが夢ってことが分かることがあるが今がその時だろう。
夢の中では自分の中で印象に残っていることが現れやすいように思える。　そして、夢の中の自分は今までの記憶を持っていない……訳ではないと思うがすごく曖昧だ。
『……ん。　……まん！』
また、俺の中に響いてくる。
夢の中の俺の曖昧な記憶の中でこれは幸せな瞬間によく聞いていた気がする。　幸せだと感じているのにそれが何か思い出せないのはもどかしさを覚える。
おそらく、この夢から覚めたらこの事の記憶も忘れまた変わらぬ日常を過ごすのだろう。
多分だが、目を覚ましたら幸せな空間にまた戻るのだと思う。　なら、この夢は俺に幸せを噛みしめるために見せるものかとふと思った。　神様も中々粋なことをするじゃねぇーか。
『……まん。　……ちまん！』
脳内に響く音がだんだん大きくなってくる。　しかし、今度は何故か分からないが怖い音。
怖いからといって目を背けるわけにはいかない。　それに、目を覚ましたら幸せな空間が俺を待ってるだろ、多分。
しょうがない、休みたい気持ちもあるが自分から動くのも悪くない。

そう思って、俺は瞼を開けた……。

× × ×

そこに広がっていたのは青空。　雲ひとつない素晴らしい晴れ模様だ。

……ん？　青空？　おいおい、まだ夢が続いているのか？

そんなことを考えていたらさっきまで頭に響いていた音が聞こえた。

「おい、比企谷八幡!!　聞こえてんだろ？　無視するんじゃねぇ！」

耳の鼓膜を通り抜けてきたのは幸せの音ではなくて人を絶望に叩きつける音だった……。

俺は周りを見渡す。　さっき青空が見えたと言ったが、それは俺が地面で横になってるからだ。

俺はさっきの怒声に反応するべく立ち上がろうとするが全然体が動かない。　おかしい。　無理に動かそうとしたら激痛が身体中を襲う。

「お？やっと体が反応したな。　反応のない奴をボコボコにしてもつまらなくてしょうがねぇ。　それじゃ……続きやるぞ、オラァ！」

俺は何故こんなことになったのかを今思い出そうとする。

頭の中に一つその答えが浮かんでくる。

それは俺がクラスのトップカーストに属するヒロインの子にカースト最底辺の俺が告白した事が原因だと指し示す。

俺がした行為は翌日クラス中に広まり、挙げ句の果てに校内に広まっていった。　俺が告白した子の人気は高い事が噂の蔓延に拍車をかけた。

そして、その噂から色々俺に関することがトップカースト達の話題になっていった。　具体的には俺へのからかい　―もちろん、蔑みなどの含んだ　―事が話題になり、またそれと同時に今俺がやられているようにトップカースト共のストレス発散の道具として使われて

いる。
どうしてこうなったんだろうな……。　俺はただ好きな子に告白され、そして振られただけだというのに。
そんなことを考えていたらいつの間にか俺の事をボコボコにしていた奴がその行為をやめたようだ。
「ふぅ、ストレスもすっきりしたしもうこんなくだらねぇやつに構ってないで帰るか。　じゃあな、オタ谷くんｗｗ」
俺はムカつき、そいつの後頭部を殴れたい気持ちが強かったが殴ってしまったら明日からはよりひどくなるし何よりそれじゃあいつらと同類になってしまう。　そんなことは避けたい。

……しかし、だいぶ体がボロボロだな。　こんなに人を殴るとかあいつ頭おかしいだろ。　全く人生ハードモード越えてナイトメアモード一直線だわ。　○ックマンエグゼ2ならサンクチュアリ貰えるレベル。
体の自由がきかないほどに殴るとかどんだけストレス溜まってるんですかねぇ……。もしかして○ナ禁???　おっと、俺も頭の状態がだいぶやばくなってるらしい。
頭はぼーっとしてきたし、青空は綺麗だし、体は動かん。　え、これ詰んでね？
そして、だんだん瞼が重くなってきた。　外でまた闇に落ちるなんて避けたいところであったが助けなんてくるような世の中でないことは重々承知しているし、何より体が動かないんだ。　俺は抗うのをやめ闇に落ちることにした……。
抗うのをやめた際に俺の耳に何かが聞こえたような気がした。

×　×　×
どれくらい時間が経ったのだろうか。　俺はまた記憶が曖昧な場所にいる。　先ほどと違うのは俺がさっき経験したことを鮮明に覚えているところだ。
ここにいるということはまた夢の中の状態か。　どうせ目を覚ま

したら野に放置された俺が動き出すだけ出し動きたくねぇ……。
マジ動きたくねぇ……。
　こんなことを考えてたらまた俺の中に声が響いてくる。
『……まん？　……ちまん！』
　さっき聞こえてきた優しい音が聞こえる。
　本当に幸せになるようだ。　さっき経験したからことから判断すると俺の人生でそんな幸せな事を味わえたところなんて本当に疑問でしかないが、この音を発している人物が幸せだったのかを俺は知りたいと思った。　それだけでこの夢から覚めるには十分だった。
　そして俺は少しながらの好奇心を動力源として瞼を開けた……。

×　×　×

　瞼を開けるとそこは屋内。
　朝の光がほのかに差し込み、そして俺の寝ている隣には人影があった。
「あ、八幡やっと起きた！」
　こいつは……？と一瞬だけ思ったが困惑することがなかった。
　なぜなら夢から覚めた俺は記憶が曖昧ではなく勿論はっきりしているからだ。
　さっきまで経験していたのは過去の記憶。　俺の闇の部分の一部。
　そして、俺に声をかけてくるこいつは俺の人生を一変してくれた最大の恩人……。こんな人物を忘れるわけがない。
　俺は体を起こし夢の中で響いていた幸せの音の意味を噛み締めつつ挨拶した。
「あぁ……おはよう、逢。」
　さらっとした黒髪はショートヘアーですごく似合っている。　中学の時に知り合ってから変わらないビジュアル。　……そして、知り合ってから呼び名以外は変化したことのない間柄。
　俺の一番の親友、星野　逢の姿がそこにあった。

比企谷八幡は気になり始める

挨拶を逢にした後も俺はまだ布団から出ないでいた。　逢は俺の姿を見て額に手を当て溜息を吐いた。
「はぁ。また八幡はそうやって布団に籠る……。」
　意味はないかもしれないが、俺にだって信念はある。　そう、この布団に籠るというこの行為に俺の信念は溢れている！　それを逢に伝えよう。
「まぁ、待て逢。　俺の話を聞いてくれ。」
「やだ。」
　あの、逢さん？　対応雑じゃない？　僕たちすごい仲良いでしょ？
「頼むから聞いてくださいお願いしますマッカン奢りますから。」
　もうそれは平謝りである。　因みに謝罪にマッカンは俺にはこうかはばつぐんだ！　他の奴らにはいまひとつなのが多いです（ソースは俺）
「マッカンなんていらないよ……。　しょうがないなぁ、八幡の話を聞いてあげる。」
　こういっていつも逢は俺の話を聞いてくれる。　中学時代は本当に助けられた。　こういう所にトップカーストの力が出てると思う。
「なぁ、逢。　セミっているだろ？」
「うん。」
「例えばアブラセミって言うのは地中に6年いる。　他の生物では3～17年とバラツキがある。　が、変わらないことがある。　それは成虫の期間が短いということだ。」
「そうだね。」
「地中の中にずっといて自分の役目を果たす時に地上へ出てそして死んでいく。　俺の布団はこのセミをリスペクトしているんだ。」
「つまり？」
「布団から出たくないです。」
「じゃあ、八幡学校の用意早くしてね～。　二年生の最初から遅刻

は恥ずかしいからね。」
そう言って逢は俺の部屋から出て行った。　出て行ったとは言ったがリビングにいるだろう。　何故かって？　俺の最愛の妹、小町は気がきくからリビングに引き止めておくのさ！
学校の用意をしている最中、俺は今日見た夢のことをふと考えた。
夢とは言ったが、見た映像は完璧に俺の記憶の中にあることと一致する。
記憶の隅に追いやっていたことが夢に浮かんでくることに疑問を隠せない。　何かあるのだろうか。
私気になります!!
後、夢の中で幸せに聞こえたあの音は何だったのだろうか。　詳しくはわからない。　それは俺がもう得ているものかもしれないし、まだ得ていないかもしれない。　幸せを得ていると実感するのは簡単じゃないからな。
いや、俺は逢と居れて充実しているが。
逢で思い出したが、あいつが俺を起こしに来た理由は家が近いからだ。　逢と知り合った後に知った衝撃の事実で何故か分からないが逢が定期的に起こしにくる。　あれ？俺って勝ち組なのん？
全国の諸君、すまなかったな！　俺は美少女に起こしに来てもらっている！　フゥゥハッハッハァァァァァァ!!!!
まぁ、今の俺とあいつの関係は親友であって恋人じゃないが。
……恋人になるにはあいつに重なってる恩が多すぎる。　少しでも対等になれたらって俺が思えたならその時は俺から告白しようと思っている。

×　×　×

用意を終え、俺はリビングに向かった。　早くしないと逢が起こってしまう。　……まぁ、惚れてる男としてはそういうのも可愛いと思うわけだが口には出せないし何より怒らせて可愛いと思う以外に得がないからな。
逢はリビングに座って待っていた。　やはり、小町が手配したの

だろうか。
「遅くなってすまん。」
「まぁ、遅刻しないくらいだし大丈夫だよ。　早く行こ。」
　待たせてしまったこともあるし後で逢に何かおごってやろう。
　あ、そういえば、
「なぁ、逢。」
「八幡、どうしたの？」
「朝、起こしてくれてありがとな。　本当は俺が起こしてやるくらいじゃないとダメなんだが……。」
「別にこれくらい気にしなくていいよ。　家も近いし、好きでやってることだから。」
「家が近いというだけで起こしに来てくれるのがありがたいんだよ。
　感謝してもしきれない。」
「本当にこれくらい気にしなくていいのに……。」
　そういって逢は顔を背けた。　こういう時の逢は話しかけると良くないのは長年の経験で分かっている。
　こうして、俺達は学校に向かっていった。

×　×　×

　学校につき、またいつも通り生活する。　当たり前の日々。
　言い忘れていたが俺と逢は同じクラスだ。　運が良くていいんじゃあぁ^～
　一年の頃は別のクラスで泣きたくなったでござるよ。　俺は孤立するけど、あいつはトップカーストだっただけあってクラスと馴染める。　対照的に俺はトップカーストの話しただけでコミュ能力上がってるわけではないからな。　相変わらず孤立している。
　ただ、総武高校はうちの中学からあまり来なかったせいで噂が広まってこないことが唯一の救いだ。
　ゴシップはロストして、一年生のグレードはフィニッシュし、二年生へリスタートするこのスプリングは実にフレッシュで新鮮な季節だと思うから気持ちをチェンジしていこうと俺は思っていたが、リア

ルはハードだった。　マジで鬼畜だわ。

……？あれ？何か俺今意識が高くなっていた気がする。　気のせいかな。　気のせいだよ。　うん、きっと気のせい。

二年生になって運良く同じクラスになれたからいいものなれていなかったら本気で辛かったと思う。　どのくらい辛いかというと、今日も朝から通勤通学！　とりあえずスマホ使うか～♪

……？あれ！　充電ねぇ！　しかも充電器もねぇ!!!

ぐらいの辛さ。　これが一年間とか泣ける。

知り合いが一人いるというのはでかいと思う。　本気で逢に感謝の言葉が多すぎて溢れてくるレベル。　だが、逢には友達がたくさんいるんだよなぁ……。

なんでこんな奴が俺と付き合ってくれるのだろうか。　中学から思っている疑問をふと思い起こした。

きっかけは朝の夢。　けど、俺は今まで深く聞いてこなかった。

理由は怖かったからだ。　……関係が崩れるのが。

ただ、それもおかしな話だ。　誰かを大切に思うなら誰かを傷つける覚悟が必要なはずだ。　俺はその段階まで行く前で立ち止まっていた。

少し進んでみようかな……。　この内に秘めた思いを実行しようと決意した。

二人とも悩みそして動き出す

さっき進んでみようと言ったな？　あれは嘘だ。

……すいません。　嘘ではないですが俺の二つ名チキンハート八幡が発動してしまった。　反省している。

進むという俺の中での決定事項は崩すつもりはないが今闇雲に進んでも逢は俺のことを気に留めないからな。

今俺がすることは何か。　迷っていたがふと俺は朝見た夢を思い出した。

俺の中学生の時……、逢と初めて会った時の記憶が俺の記憶で曖昧になっているから今朝みたいな夢を見たんだと思う。　じっくり思い出して答えを出していくしかないか。

そんなことを考えると、俺は頭を叩かれた。

「こら比企谷！　授業に集中しろ！」

その言葉を聞いて俺は今が授業中だということを思い出した。

てか、教師が今生徒を叩きましたよ！　……まぁ、俺は何も言わないけど。

「はい、すいませんでした。」

こういう時には何も言わないのが何の問題もない。

「おい、比企谷。　後で職員室に来なさい。」

そういって、その先生……平塚先生は授業に戻っていった。　おい、言い返せないタイミングに言うのはやめてくださいよ。　逢もこちらを見ている。　俺は大丈夫と目線で答えた。

一体何で呼ばれたのだろうか。　私気になります！　いや～こわいな……。

また怒られるのは怖いので俺の得意教科の国語を受けていく。

×　×　×

放課後、俺は平塚先生の元へ行こうとしていた時に逢に声をかけられた。

「八幡先生のところに行くの？」

「あぁ、呼ばれちまったしな。　最近は俺と一緒に帰ってるけど別にお前には友達がたくさんいるんだし先に帰っててていいぞ。」
「え……。　あっ、うん。」
逢が少し悲しそうな顔をしたが何でだろうか。　たまには友達と帰るのも悪くはないと思ったのだが。　俺の心の中にある一つの説がある。　だが、俺は俺の思い上がりという可能性がある。
その思い上がりで俺は過去何回失敗した？　思い出せ。
俺は、星野逢という女の子に対しては失敗はできない。　それは恩人であり、また俺自身の気持ちのためだ。
「じゃあな、逢。　また明日。」
そう言って俺は教室のドアをくぐった。
×　×　×
～　星野　逢　ｓｉｄｅ　～
さっき八幡に先に帰っててと言われた時私の心の中は複雑な気持ちでいっぱいになった。
八幡が似たようなことを言った時には毎回こんな気持ちになる。
この気持ちはなんだろうか。
～　２年前　～
中学の時に出会った不思議な男性。　かつて私は道端でクラスメイトの男子に殴られていたところを目撃した。　私はクラスメイトが八幡の事を蔑んだことを言っているが私はそうは思わなかった。
彼は自分の好きな人に告白しただけなのだ。　なんで彼を忌み嫌うなのが分からない。　だから私は彼を介抱した。　クラスメイトがそういう対応をしてごめんね……。　私は勇気がないからクラスメイトに言えないけどこれで償いになるかな……。
こんなことを考えて私は彼を助けた。　私の心にあったのは償いの気持ち。
「ねぇ、大丈夫？　怪我ひどいよ？　意識ある？」
返事はなかった。　私の心がざわつく。
どうしよう……。　どうしよう……！　私が今までクラスメイトに比企谷くんの立場を擁護しなかったからこんな事態になったん

だ。　私のせいだ。　私のせい……だよ。
なんとかしないと……。　これは私の責任だ。

×　×　×

こんなことが私の昔にあった。　あれから色々あって八幡と触れ合いが多かったが、私の心の中にある感情がある。　これは八幡にも伝えていない。
なぜなら、私の中でもまだ分かっていないことだからだ。
けど、答えは出そうと思う。
その一歩として、さっき八幡は先に帰れと言ったけど待っていようと思う。　この気持ちを確かめるため大事な、大事な一歩。
はぁ、八幡早く帰ってこないかな。

やはり俺のきっかけは間違っている

平塚先生に呼び出された俺は職員室へ向かいノックしてそして入る。　なんの無礼もなく入ることが呼び出された者への最低限の義務……というより平塚先生が怖いだけです。　衝撃のファーストブリッドとか打ちそうでびくびくしてる。

職員室内で目的の人物を見つけその人の前まで行く。　向こうもこちらに気付いたらしく体をこちらへ向ける。　う……。目を合わせて会話するの地味に辛い。

「やぁ、比企谷。　なんで呼び出されたかわかるかな？」

え、頭叩かれたしどう考えてもあれだけしか思いつかない。　他に解があるのだろうか。

俺は首をかしげつつ答える。

「授業に集中していなかったからじゃないですか？」

「それもある。　ただな比企谷。　私は若いから仕事がたくさんあって忙しいんだ！　若いから！　だからそんなくだらない理由で呼び出す訳無かろう。」

ちゃっかりこのひとすごいこといってる。　てか、教師がそんな事言っていいんですかね。

「はぁ、じゃあなんでしょうか。」

今日は逢と一緒に帰れなかったためいつもの９／１０不機嫌だ。

え、なんで1より小さいかって？　そりゃ大きくしたら平塚先生にボコられますよ。　いや、ボコられはしないだろうけど。

実際は７３／１０ぐらいの怒りはあるが全力で抑えてる。

「私が授業で出した課題は何だったかな？、比企谷。」

課題は　……？　はて、そんなものあったであろうか。　全く記憶にない。　今朝見た夢の方が覚えているレベルである。

いや、今まで逢が家に尋ねた回数の方が覚えているかもしれない。

……俺が予想以上にキモさの闇を抱えていた。　ふぇぇ……八幡キモいよぉぉ……。

「ほら、『高校生活を振り返って』っていう作文のテーマの奴だ。

なんだこの犯行声明みたいな作文は？　テロリストなのか？
バカなのか？」
そういって平塚先生は俺の書いたであろう作文を俺に見せる。

×　×　×

レポート提出用紙
「高校生活を振り返って」

2年F組　比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。
青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺く。
自らを取り巻く環境の全てを肯定的に捉える。
何か致命的な失敗をしても、それすら青春の証とし、思い出の1ページに刻むのだ。
例を挙げよう。　彼らは万引きや集団暴走という犯罪行為に手を染めてはそれを「若気の至り」と呼ぶ。
試験で赤点をとれば、学校は勉強するだけの場所じゃないと言い出す。
彼らは青春の二文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げて見せる。　彼らにかかれば嘘も秘密も、罪科も失敗さえも青春のスパイスでしかないのだ。
そして彼らはその悪に、その失敗に特別性を見出す。
自分たちの失敗は遍く青春の一部分であるが、他者の失敗は青春でなくただの失敗にして敗北であると断じるのだ。
仮に失敗することが青春の証であるのなら友達作りに失敗した人間もまた青春ど真ん中でなければおかしいではないか。　しかし、彼らはそれを認めないだろう。
なんのことはない。全て彼らのご都合主義でしかない。　現に俺もそれで苦労している。
なら、それは欺瞞だろう。　嘘も欺瞞も秘密も詐術も糾弾されるべ

きものだ。
彼らは悪だ。
ということは、逆説的に青春を謳歌していかい者のほうが正しく真の正義である。
結論を言おう。
リア充爆発しろ！

×　×　×

読み終わって少し考える。　確かに俺の名前が書いてあるし俺の書きそうな文面だ。　本当に書いたこと思っていなかった。
てか平塚先生怖い、怖いですって！
「何か言うことはあるか？」
「俺はちゃんと高校生活を振り返って書いたんですけれど……。」
これだけは胸を張って言える。
「普通こういう時は自分の生活を省みるものだろう。」
「だったらそう前置きしてください。　そうしたらその通り書きますよ。　これは先生の出題ミスであってですね。」
「貴様屁理屈を言うな。」
教師に貴様って言われたの初めてだよ……。
平塚先生はタバコを取り出し火をつける。　俺から見てもかなりしっくりとくる動作で俺は驚きを隠せない。　マジで似合ってるよ。　俺が同年齢なら惚れていたかも。　まぁ、今の僕は片思い中なのでごめんなさい。
「なぁ、比企谷。　君は部活をやっていなかったよな？」
「はい。」
「……友達とかいるか？」
「はい。」
人数は聞かれていないので逢１人だけだったがいることには変わりない。　言うと同時に逢との友情が切れないことを俺は望んだ。
「え、なんだって？」
おい、そこ難聴系かぁ？　マジで難聴姉貴はＮＧです。

「嘘をつくんじゃない。」
「いや、嘘じゃないんですが。」
「え、本当か？」
「はい。」
俺に何回同じ返事をさせるんだ。　てかまだ信じてないでしょ先生。
先生はふぅっと煙を吐きだし、落ち着いてから口を開く。
「……よし、こうしよう。　レポートは書き直せ。」
「はい。」
ですよね。　さすがの俺のあれは酷いと思ったししょうがないか。　けど思ってることを書けないのは辛い。
「ただ、君は心に闇を抱えているらしく自分の嘘を誠だと信じている。君みたいな腐った魚のような目をしている者に友達など出来るわけがない。」
「え、さすがに酷くないですか。」
さすがの俺もドン引きである。
「そこで君には罰として奉仕活動を命じる。　罪には罰を与えないとな。」
なんでこの先生嬉しそうなんですかねぇ……。
「奉仕活動って何をすればいいんですか？」
「ついてきたまえ。」
いきたくねぇ……。　足がすごい重くなる。　逢の帰りを断った選択がこれとかあんな作文を書いた俺を恨む。
「おい、早くしろ。」
脳裏に逢を想像しつつ俺は平塚先生の後ろをついていった。

そして雪ノ下雪乃と邂逅する

俺は平塚先生の後を追いながら考えていた。　俺の心の中には疑問点が数個も羅列しているが、その中でも一番思っているのは『奉仕活動って何するんだ？』ということである。

そりゃ俺だって男だ。　かわいいお嬢様の執事的な存在となるなら御奉仕しますよ。　てか、逢にしてやりたい。　恩返しと称しながら一緒にいたいわ

まず、思いつきで奉仕活動させようってのが既におかしいのだ。

この俺に仕事を持ってきたことを後悔させてやる……！

今向かっている場所が特別棟というのもその奉仕活動に含まれている狂気さが増幅して俺の中でアラームが鳴ってる。　いや、定期的になってるからスヌーズかもしれない。　スヌーズモード早くきれないかなぁ……。、

とにかく、この奉仕活動に嫌な予感しかしない。　俺にだって抗うことができる。　しかし、なんと言えばいいだろうか。　考えろ。　なんのための国語３位だ。　逢に褒められてその日一日中顔のにやけが止まらなかったあの時を思い出せ。

「先生、俺トーチなんで奉仕活動すると消えちゃうんですよ。」

「消えたらお前の存在を認識してるやつはフレイムヘイズ以外いないから酷使できるな。　頑張れ。」

マジかよ……。　返しが完璧やった。　まさか○眼のシャナ把握してるとはあの三十路やべぇ。

俺は感服したためしぶしぶ文句は言わないことにした。　なんなら封絶使って奉仕活動するまである。

「着いたぞ。」

先生が立ち止まったのはなんの変哲も無い教室。　プレートには何も書かれていない。

俺が不思議に思って眺めていると先生はからりと開けた。

さてさて、私の熱い奉仕活動、ホウカツ！始まります！　フフッヒ　って言って相手を威嚇するべきか迷うな。　そもそも相

手がいない可能性もあるからやっぱりやめておこう。
その教室の端っここには机と椅子が無造作に積み上げられている。
倉庫として使われていたのだろうか。
他の教室とはそれ以外は何も変化のない普通の教室。
けれど、そこがあまりにも異質に感じられたのは、一人の少女がそこにいたからであろう。
この子が俺の奉仕活動の御主人とふざける間も無く俺はあまりにもその子の読書姿が絵の一部のようにも見えるくらいの美しさがあり不覚にも見とれてしまっていた。
「平塚先生、入るときはノックを、とお願いしていたはずですが」
端正な顔立ち。流れる黒髪。クラスの有象無象の女子たちと同じ制服を着ているはずなのに、まるで違って見えた。
「ノックしても返事した試しがないじゃないか。」
「返事する間も無く、先生が入ってくるんですよ。」
平塚先生の言葉に彼女はジト目で返す。　ジト目って可愛いですよね。
「それで、その性犯罪者の様な目線を向けてくる人は？」
いつの間にかそのジト目が軽蔑の眼差しとなって俺を捉えていた。
何故分かった。
俺はこの少女を知っている。
二年Ｊ組雪ノ下雪乃。
無論俺みたいな一般ピーポーが有名人の顔と名前を知っているだけで話したことなんて一度もない。　てか、俺がまともに会話をするのが逢だけなんだよ。　言わせるな恥ずかしい。
総武高校には普通科９クラスの他に国際教養科というのが１クラスあり彼女はその中でも異彩を放っている。
あ、胸の大きさが紅一点で異彩を放ってるわけじゃないですよ？
確かに慎ましいですが。
彼女は定期テストで毎回一位に君臨する。　マジッベー、ッベー。　定期テストは逢と出会ったあの時から俺にとって勉強会（成功確率１／３）となっている。

そして、彼女の容姿は誰からも注目を集めるほどに優れている。
なんでしょうねこの完璧超人。
てか、雪ノ下さん。　性犯罪者って訂正してください！　俺は性犯罪者になんてならない！　俺が女と見ているのは今の所小町と逢だけだ。　あれ？これやばくね？
「彼は比企谷八幡。　入部希望者だ。」
何か今おかしい言葉が聞こえた。　ＮＹＵＢＵ？　はっはっは、冗談はやめてくださいよ平塚先生。
「入部って何の話ですか……。」
思わず突っ込んでしまう。
「平塚先生、話してないんですか。」
雪ノ下は額に手を当て頭を悩ませている様子。　平塚先生が中々やばい。
「おっと、話してなかったな。　君にはペナルティとしてここでの部活動を命じる。　異論反論質問抗議口答えは認めない。　しばらく頭を冷やせ。　反省しろ。」
さすがにこれは文句を言いますよ私は。　Ｎｏも言える人間になろう！
「なんでですか……。　先生の友達がいるかって質問にいるって答えただけじゃないですか。」
「ほらそれだよ。　信用ならない。」
このアマ……！　俺を舐めすぎである。
「えぇっと……そこの……」
雪ノ下がこっちを見ていた。　そう言えば名前言ってなかったな。
「二年Ｆ組の比企谷八幡だ。」
「ありがとう。　比企谷君、確かにあなたが友達がいるって言うのは信じられないわね。」
なんなんだこいつらは。　人をなんだと思っている。　……まぁ、逢が話してくれなかったら今頃もぼっちだな。
「だろ、雪ノ下。　と言うわけで比企谷を入部させたいのだが。」

「お断りします。」
雪ノ下さん？　流石優等生だな。　俺には入部させなくてもいいくらい分かってくれるか。
「そこの男の下心に満ちた下卑た目を見ていると身の危険を感じます。」
「……」
お前の慎ましい胸元なんて見ねぇよ！　……いや、本当ですよ？
ほんとほんと。　オレウソツカナイ。

「安心したまえ、雪ノ下。　その男は目と性根が腐ってるだけであってリスクリターンの計算はばっちりだ。」
「何一つ褒められていねぇ……。　全然違うんですが。　俺は常識人なんで常識的な判断ができると言ってください。」
「彼は確かに先生がおっしゃった通りの性格のようですね。　……まぁ先生からの依頼であれば無碍にはできませんし……。　承りました。」
すごい嫌そうですね雪ノ下さん。
「そうか、ならよろしく頼む。」
先生は満足そうに頷きそのまま帰っていった。　……あのー？
百歩譲ってこの部活に入るのはいいんですが何をする部活なんでしょうねぇ……。

そんなことばかり考えていたせいか気づくのが遅れた。　俺は今雪ノ下雪乃と二人きりでいるのだ。　え、なに？　これラブコメ？　ラブコメだったの？
そんな訳があるわけがない。　ラブコメ遅れるなら俺に中学の頃から幸せにしろ……とは言わない。　あの事件があったから俺は逢と会えたのだ。　彼女にとって俺と出会ったのは幸せなことかは知らないが重荷になっていないことを出会った時から願っている。
時計の針がチク、タクと進む。　本のページをめくる音が遅く感じ

る。　つまらない時間ほど長く感じるというがその通りだと思う。
今俺と雪ノ下はなんの接点もない状況だ。　そもそも出会いがあんな会い方では会話もろくにできないだろう。
「ねぇ、比企谷君。」
そう思っていた矢先に雪ノ下から声がかかってきた。
「あなたさっき友達いるとか妄言をつぶやいていたけど実際のところいるのかしら？」
「さっきから何回も言ってるだろ？　居る。」
「じゃあ、その友達を呼んで来てもらえないかしら？」
確かにそれが一番解決方法としていいだろう。
だが、あいつは今帰ってるんだ。　あいつの友達との時間をぞんざいに扱ってはいけない。
「悪いな。　今日平塚先生に呼び出されたから先に友達と帰るよういったんだ。だから今日は呼べない。」
「そう……。　完璧に聞こえる言い訳ね。」
この人まだ信じていませんよ。
「なら、今度連れてくるからその時でいいか？」
「なら構わないわ。」
そこらへんの物分かりはいいんですね……。
てか、忘れてたけどこの部活が何の部活だか聞いていねぇ。
「なぁ雪ノ下。　この部活って一体何をやる部活なんだ？」
「……そうね、ならゲームをしましょう。」
なんでこいつは棗恭〇みたいに言ってるんだ？
「ゲーム？」
「そうよ、部活の名前を当てるゲーム。」
なるほど。　単純なゲームだ。
だがな……本当に何をするんですかね。　雪ノ下は本を読んでるだけ。　部活に使いそうな道具もない。
とりあえず、思い当たったものを一つ答える。
「文芸部か？」
本気でこれしか思いつかない。　これで外れたらギブアップも

辞さない。
「違うわ。」
うわぁぁぁぁぁぁぁぁ。　マジかよ、多分俺の顔は今悲壮感にあふれていると思う。
「マジかよ……。　そういえばさっき平塚先生は奉仕活動とか言ってたな……。　ボランティア部とかか？」
ボランティアは部活でやるものではないとは思うが思いつかないので答えてみた。
「違うわ。　いい線だったけどね。」
もう思いつかない。　素直に降参しよう。
「だめだ、思いつかない。　ギブアップだ。」
分かりやすく両腕を上にあげる。　気のせいか雪ノ下が満足気ですね。
「持つものが持たざる者に慈悲の心をもってこれを与える。　人はそれをボランティアと呼ぶの。　途上国にはＯＤＡを、ホームレスには炊き出しを、モテない男には女子との会話を。　困っている人に救いの手を差し伸べる。　それがこの部の活動よ。」
いつのまにか雪ノ下は立ち上がり、自然、視線は俺を見下ろす形となっていた。
「ようこそ、奉仕部へ。　歓迎するわ。」
まったく歓迎されてるようには思えないんですけど、雪ノ下。

比企谷八幡は深く考える

あの後俺は逢を連れて行けなかったことから妄言だのと少しは言われたがどうやら明日まで猶予はあるらしい。　つまり、明日逢に用事があったならば俺は奉仕部でずっと友達がいると妄言を吐いている痛々しいぼっちという格付けがなされてしまうのだ。

明日まで伸ばしてもらったから今日はもう奉仕部はおしまいらしい。　まぁ、対象の俺が明日連れてくるといったからしょうがないことではあるのだが。

部室から教室に行くまでに考える。

俺はこのまま不名誉な格付けでいいのか？

答えは否だ。逢がいるのにこんな不名誉なことは避けたい。　もう祈るしかない。　て言うかデートを誘う勢いで逢に「明日暇？」って言ったほうがいいかもしれない。

流石にぼっち歴が長い俺でもこういったことは直接言う方がいいのは知っているからな。　それに相手は逢だ。　……つまり俺が恋をしている人物。

さっき直接いいのがいいと言ったが正直に言えば俺自身がそんなことを信じていない。　ただ、誠意を見せたいという自己満足のためだけだ。

直接言って過去に失敗した俺は辛い時間を過ごした。　過ごして得たのはかけがえのない人。　それが本物かどうかはまだ自信が持てない。

……けど、本物を得るために足掻いたっていいだろ？

とまぁ、逢に直接言うのは俺の中での確定事項だとしてもいつ会えるかな。　今朝は逢がたまたま起こしに来たけど奴は気まぐれやだからな。

……って同じクラスだからいつでも会えるか。　いつまでも去年の感覚を引きずってはいけない。

そう考えると教室に着いた。　じっくり考えると早い早い。

俺は荷物を取るために教室の戸を開けた。

「遅いよ、八幡。　私待ってたんだからね。」
ん？　おかしい。　幻聴かな？　幻覚かな？
俺の視界には既に帰ったはずの人物がいて、俺の鼓膜にはその人物の声の振動が通り抜けるのを感じた。
「あれ、おかしいな。　逢の姿が見える。　帰ったはずなんだが。」
思わず口に出すほどの驚き。　いや、本当にビビりますって。
「八幡流石に酷くない？　八幡の一番の親友が待っててあげたんだよ？　感謝の言葉の一つや二つくれたってお釣りがくるくらいじゃないかな？」
そろそろ認めざるを得ないな。　俺の片想いの対象、星野　逢がいることを。
「逢、お前何でここにいるんだ？　先に友達と帰ったんじゃないのか？」
「八幡が勝手に友達と帰れって言ったんだよ。　私は友達に帰りを誘われなかったし、自分の意志で八幡を待っていたよ。」
お前が帰り誰にも誘われないわけないだろ……。　俺にだってそれくらいわかる。　なんで俺の事を待ってたんだ？　単刀直入に聞きたい。　が、聞けない。
それを聞いた途端何かが壊れる気がする。　正確に言えば”今の仲で”それを聞いた途端壊れる、だが。
確かに仲良くなったとは思う。　中学であいつが話しかけてくれて話し相手ができた。　ある時からか、あいつから積極的に話しかけてくるようになった。　あいつはトップカーストの一員だってのに俺によく話しかけてくるようになった。
俺としてはあいつの立ち位置が心配で仕方がなかった。　そりゃそうだろ？　あいつの立ち位置がおかしくなってるのは俺という存在のせいだ。
けど俺はそれをあいつに直接は聞けていない。　聞かないのは俺がチキンハートを持っているからではなくあいつなりに知られたくないことがあるだろうし何かあるならあいつから離れていくと思ったからだ。

それの思いとは逆にあいつは離れて行かなかった。　不思議で不思議で仕方がなかった。　俺の中での逢の存在が次第に大きくなっていくのを感じた。

これが俺の逢を好きになった理由の概要だ。　実際にはもっと色んなことがあった。　いずれ具体的な事を思い出す時がくると思うがそれはまた今度の機会だな。

つまりはまだ足りないってことだ、両者の理解が。　……俺は心の中でまだ逢が償いで話していると思っているのかもしれない。

俺は同情とかで話して欲しくない。　そう思ってたはずなのに、逢が俺を助けてくれた時俺は逢に恩を売ったと思ったから俺は話し始めた。　返す見込みのない長い長い道を歩んだ。　いつの間にか惚れていた。　惚れた男というのは辛いですねぇ……。

話が長くなったな。　色々考えた結果俺が取る行動はいつも通りだった。

「そうか。ありがとうな。」

「うん。　じゃあ、八幡帰ろっか♪」

「おう。」

俺は荷物をまとめ帰る準備をする。　逢を待たせるわけにはいかない。　そして、俺は覚悟を決めないといけない。

教室の戸を閉め、昇降口へと向かう。　校舎内にはもう誰も残っていないのだろうか？　人気が感じられない。

「そういえば、八幡平塚先生に呼ばれたにしてはやけに長時間だったね。　何かやらされてたの？」

と逢が突然聞いてくる。　俺もそれを話題にしようと思っていたから都合がいい。

「あぁ。　呼び出された理由は授業に集中していないことじゃなく高校生活を振り返る作文が酷いって言う件だった。」

「あぁ……。　確かに八幡が呼び出されそうだね。」

と逢は内容を想像したのだろうか？　ジト目でこっちを見る。

かわいい。　ずっと見つめていたい。　付き合ってください。

そんな事は言えるわけがありません。　はい。
「後は平塚先生にお前は友達がいるのかって聞かれているってら答えたら何故か分からないが奉仕部という部活に入部されされた。」
「突っ込みたいところが色々あるんだけど……。」
と逢は額に手を当てて困惑に耐えながらも聞いてくる。
「何で友達いるって答えたの？」
俺たちは今昇降口に居たのだが、俺のこの驚きは今手に持っていた靴を落とした事により表現されました。　Ｎｉｃｅ　ｓｈｏｓｅ
「え、俺泣いちゃうよ？」
「うそうそ。　八幡と私は親友だよ……うん。」
何故か分からないが逢が声のトーンを落とした気がする。　前も言いましたけどね、私はその動作一つ一つに勘違いするわけにはいかんのですよ。　ねぇ、逢さん。　男を勘違いさせる行為によって世の中の男は何人戦場へ赴いてその大半がそういったトラップにより死んでいくのですよ……。　私を惑わせないでください、もう恋を失敗したくないんだ。
「よかったよ。　おかげで今日の俺はコンビニでロープを買いに行くところだった。」
「重いよ、八幡……。」
おっと、重い発言をしてしまった。　八幡の青春ポイントー５０
「すまんすまん。」
「まぁ、そういうところも面白いからいいけどね。　ごほん。まぁ、平塚先生がなんでそんな質問をしたのかは気になるけどじゃあ次。　奉仕部って？」
「俺も知らなかったんだが、なんか困ってる人がいたら手を差し伸べる部活だとよ。」
本当に説明するところがこれくらいしかないのが既におかしい部活である。
「そんな部活あったんだ……。　で、なんで八幡がそこに入部させられたの？」
「なんか友達いる発言が妄言だと思われてペナルティとして入部に。

何を言ってるか分からねーと思うが。」
「じゃあ、私が会いに行ってあげるよ。」
「え？」
俺は驚いた。　何にって？　そりゃあ、俺が頼もうと思ったことを自主的に言ってくれたからだ。　……逢は優しいよ。
「八幡が友達いないって言われるのはその親友である私も馬鹿にされてる気がするからね。　一度ガツン！と言ってやらないと。」
と逢は大袈裟に動作をしながら俺に言う。　微笑ましく俺はつい笑ってしまう。　中学の頃からこういうやつだったな。
「ありがとう、逢。　じゃあ、明日の放課後一緒に奉仕部について来てくれるか？　……後、明日は友達と帰る約束とかないよな？」
「だから誘われないって、大丈夫だよ八幡。　……気遣いありがとね。」
「ばっか、そんなんじゃねぇよ。」
そうだ、これは気遣いではない。　恩の支払いの一環だ。　惚れた男の醜い行動だ。
「ふふ、八幡ったら。」
「なんだよ逢。」
「いや、何でもないよ。　早くか～えろ♪」
「おう。」
よし、これで雪ノ下に吠え面をかかせられる！　明日の楽しみが一つ増えたぜ。
夕日は疲れたとばかりに輝きを少しずつ失い、やがて夜になっていく。　夜が過ぎればまた朝となる。　今夜はどんな夢を見るのだろうか。
「どうしたの、八幡？　夢が気になったようか顔をしてさ。」
「え、お前俺の心読めるの？」
「何と無くだよ。　なんだかんだ長いしね。」
「そうか……。　」
そういえば長くなるな。　そう思ったからだろうか。　口からこぼれてしまった。

「今朝過去の夢を見たんだ。　……逢との出会ったときあたりのこと。　俺がボコボコにされててお前が来たあたりの事。」
逢の肩がピクンと動く。　逢にとっても色々あったことなのだろう。
「改めて思ったよ、逢ありがとう。」
「だからそういうのはやめてって。　感謝されるようなことはしていないよ、八幡。」
「あぁ……。　事あるごとに毎回言うのやめないとな。　大分俺お前と会ってから変わったよ。」
「ふふ、私もだよ八幡。　けど、勘違いしないでね。　私の変化は良い方への変化だから。」
と逢は明るく言う。　俺も負けず劣らず言い返す。
「俺だって大分良くなったよ。　見違えるくらいにな。」
「ほんと、そうだね。　想像もできないよ。」

ついつい過去の回想に耽ってしまう。　それほど過去が大きかったのだ。　だが、履き違えてはならない。
過去を乗り越える時を間違えないこと。　それが今俺に必要なことだ。

……だけど今くらい振り返させてくれ。

×　×　×
ずいぶん長いこと話していたと思う。　もう辺りは真っ暗だ。
あいつのことを家に送って俺は帰宅した。
「おっかえりー！お兄ちゃん♪」
なんかエンジェルの声が聞こえますね……。
「おう、ただいま小町。」
「ご飯にする？　お風呂にする？　それとm「ご飯でお願い。」」
こういうのは早くいうのが大切である。　気持ちは逆でも男には我慢しないといけない時がある。　それが今だ。

「おっけー。　あ、お兄ちゃんちゃんと逢さんと話した今朝？」
「おう、ちゃんと話したぞ。　今に通してくれたの小町のおかげだろ？」
「えっへん！　小町頑張りました！　あっ、今の小町的にポイント高い！」
ナイスだから特別に頭を撫でてやろう。　ほーれ、よしよし～。
「ちょ、お兄ちゃんやめて。」
ちょっと怖いトーンが聞こえたのですぐにやめます。　お兄ちゃん辛い。

×　×　×

ご飯を食べ終わり俺は今夜見る夢が気になっていた。　２日連続はないとは言えないがもしかしたらありえるかもしれない、そう思ったからだ。
そんなことを考えていたらメールが来ていた。　メールなんてくる相手ダエモンか逢しかいないので自動的に逢である。
「今から寝るんだけど八幡の話を聞いてたら私も自分の夢が気になってきちゃった笑。今日は私も夢を気にして寝てみるよ。　明日話し合おうね、八幡^　^」
どうやら、逢はもう寝るようだ。　俺もそろそろ寝ようか。
長かった１日はもうそろそろ終わりを迎える。　けど、この１日は俺にとってはスタートを切らせてくれた一日だと思う。
こんなも逢の回想が見れますように……そう思って闇の中へと落ちていった……。

過去の回想で思うことは

頭の中に響いてくる音があった。
それはある時は怖くて……またある時は優しい。　そんな不思議な音。
何度も響いてくる。　まるで俺を呼んでいるかのように。
この感覚は俺はつい昨日体験した。　また、俺は夢の中で意識があるらしい。　俺はなんかの能力に目覚めてしまったのか？
夢の中で意識があるだけの能力とか悲しくなるからやめて欲しい。
こういう感覚になるとき昨日の夢から俺が勝手に推測するならば、現実世界で何か俺に意識させたいことがあるということ。　それがいつ必要になるかは分からんが意識しとけよってことのように思える。
じゃあ、今回はなんだろうか。
俺の中に響いてくるこのある時は怖く、ある時は優しいこの音は。
『……え……！　……ぶ？』
……？　さっき俺は優しい音と言ったものはおそらくこれだと思う。　今俺の中に大きく響いてきたこの音、これは優しい……というより心配？　そんな感じがする。
そういえば、今の俺は昨日同じ感覚をしてあの場面を見た記憶以外の記憶はなぜかまたない。　夢というのは都合のいいものである。
昨日の夢の記憶があるから今回もまた何かあるって思う……思うよね？　また昨日みたいに逢との事を思い出させる記憶だろうか。
視界は真っ暗。　今ここでできるのは目を開けた時の想像、そして、目を開けること。　この二つだ。
そして、俺はその二つのうちの一つ想像することはもう済んだ。
なら取る行動は一つだろう？
俺はゆっくりと瞼を開けた。

×　×　×

そこに広がっていたのは青空。　雲ひとつない素晴らしい晴れ模

様だ。
……ん？　青空？　おいおい、まだ夢が続いているのか？
てか、この反応昨日もしたな。　瞼開けた光景が同じとかえ、俺またボコられたの？
どうやら俺はまた倒れているらしい。　さて、起き上がろうか。
そう思っていたら俺の鼓膜を通り抜ける感覚がした。
「ねぇ、大丈夫!?　しっかりして、後もう少しだから！」
これはなんだ？　声のする方へ首を向ける。　……？　向けようと思っても思ったように動かない。　体が重い。　なんだこれは。　俺に何が起こっている？
首が動かないから可能な限り目で視認するしかない。　俺はゆっくりと状況を確認することにした。
まず一つ。俺の体の周りは血でいっぱいだったということ。
二つ目、腕に犬を抱えているということ。　三つ目、近くに黒塗りのリムジンがあること。　四つ目、黒髪のパジャマを着ていた子が俺の事を心配してたこと。
ざっとこんなところかな。　……ん？俺やばくね？　どうしてこうなった。
さっき開けたばかりの瞼はさっそく重くなり始める。　どうやら相当やばいらしい。　その前に思い出せるだけ思い出さなくては。
俺の意識が闇に落ちる前俺はある事を思い出した。　俺は高校の入学式の時に初日かは逢にお世話になってたらいけないし逢よりも先に学校に行ってやろうと張り切って登校したら、何故かはわからんが犬が道路に飛び出しその時ちょうど黒塗りのリムジンが来ていたのだ。　これは考えるよりも先に体が動いていた。　あの犬を助けるために動いていたのだ。　そして今こうなっているという訳だ。　ここまで思い出して俺は闇に落ちた。
×　×　×
俺はまたあの真っ暗な世界へいるみたいだ。
いや～今回もまた瞼を開けたら俺が大変なことになっていました

ね……。　なんで俺はこんなことを忘れていたんだろう。　本当に忘れていたんだから驚きだ。
あの件があったから俺は高校生活1日目から病院送り、何とか一命を取り留めたが同時に高校生活最悪のスタートダッシュを切ったのだった。　悲しい事件でしたね……。

そういえば昨日はこの後に逢に起こされたんだっけか。　迷惑をかけるわけにもいかんし今日は早く起きるか。
というわけで……ただいま世界。

×　×　×

瞼を開けるとそこは見慣れた場所だった。　内心ホッとしている。　また血塗れでいたらこっちの精神が持たなかったからだ。
さて、逢が今日も来るかは分からんがどちらにせよ早く支度をしよう。　どうせ逢とは教室で会うし、放課後も会う約束をしているからな。
さてここで問題ぁ。　俺は今着替えている。　それもズボンの方をだ。
逆ラッキースケベ（女子にとってはセクハラ）が起こり得るだろうか？

答えは否だ。　なぜならこれは青春ラブコメではないからである。
そんなくだらない事を考え着替え終わり俺はリビングへ向かった。
リビングには小町が飯を食っていた。
「あれ、お兄ちゃん。　今日は早いね。」
「おう、小町。　まぁ、逢が来る可能性もあったし起こしてもらうのも悪いからな。」
「え、お兄ちゃんがまともな事を言ってる……。　今日何かあるかもね。」
「小町……。　そういうのを真顔で言うのはやめてくれ。　お兄

ちゃん悲しいから。」
ただでさえ今朝の夢が交通事故で死にそうになる夢だったんだ。
まるで今日交通事故に遭うみたいじゃねぇか。
……いや、これはフラグでも複線でも何でもないからね？　そうホイホイ交通事故が起こってたまるものか。
「まぁ、冗談は置いといて。　そんくらい毎朝早く起きて毎日逢さんと登校すればいいんじゃない？」
「小町……、その手があったな。　今まで気付かなかった。」
「気付かなかったの!?」
ずっと寝ていたいという気持ちが強すぎてその思考回路に至らなかった。　この思考回路に至ったのは昨日の夢のおかげかもな。
「確かに逢が不定期に俺の家に来て一緒に登校するのもおかしいしな。　愛にそう言ってみるか～。」
「その心意気だよ、お兄ちゃん。　じゃあ、早くご飯食べて登校しようね～。」
「おう。」
早くとは言っても小町の料理を早く食べるなんて勿体無いことはしない。　幸せをかみしめて食わないとな。
さっき小町が言っていたことも今日言うとして、今日は俺にしては忙しい日になりそうだ。
×　×　×
飯を食べ歯を磨き玄関を開ける。
「あっ……。」
不意に声がした。　その声の主は俺の目の前にいる。
「今日は早いね、八幡。　おはよう。」
その声の主はいつも通りの笑顔を俺に振り向いてくれた。
「おはよう、逢。　昨日お前に起こしてもらったから今日は早く起きようと思ってな。」
「私としては遅刻の危険性が減って凄く安心したけどね。」
俺は通学路へ歩き出す。　歩き出すと逢が隣へ並んでくる。
通学路には不思議なことに俺たち以外に人の気配は感じられない。

そこで俺はさっきまで話したことを話す決意をした。
俺は思った。　これは俺が逢に対して踏み出す最初の第一歩になる。　昨日あの夢を見ていなければずっと進まなかったこの一歩。　慎重に進んでいこう……と。
「……なぁ、逢。」
「どうしたの、八幡？」
きょとんとして逢は俺に顔を向けてくる。
「これから毎日一緒に登校しないか？
朝の静かな通学路に俺の声が響く。
「……いいよ。」
俺は逢の方を振り向く。　変な顔をしていたと思う。　まだ現状を認識できていなかったからだ。
ここで俺が言う言葉を間違えたら相当恥ずかしいぞ。　「え、何だって？」はＮＧだ。　確実に嫌われる。
「本当にいいのか？」
「いいよ、八幡相手だし。　それに時々登校するってのも我ながらおかしいって思ってたからね。　これからもよろしくね、八幡♪」
「……あぁ、これからもよろしく。」

俺は内心でエンダァァァァァァァしてました。　それほど感動した。　それを感じ取られると色々面倒くさいので心の中だけのお祭り。
「そういえば、八幡昨日はどんな夢見たの？　私は……八幡とのことだった。」
それを言った逢は少し複雑そうな顔をした。　おそらく俺とは違った部分であり、またトップカーストならではの問題だろう。
「俺は入学式の時に俺に起きた交通事故の夢だったよ。」
「……八幡、ごめん。　あの交通事故の事あまり思い出したくないんだ。　被害者は八幡で私は関係ないけどさ、あの時の八幡を思い出しちゃって本当に辛くなるから。」
「逢……。　分かった。今度から話題に出さないよ。　まぁ、俺

もその事を忘れてたぐらいだ。　逢も気にするなよ。」
「うん、気遣いありがとね。」
似たようなことを何度も言うが俺は逢を守ってやりたい。　この子を守るためなら俺は何でも……。
「あ、もう学校だね。　今年度は同じクラスになれて良かったね♪」
「本当だよ。　俺は逢がいなけりゃ学園生活の1／8も楽しめん。」
「それはそれほど私といるのが楽しいってこと？」
あ、墓穴掘ったかもしれん。　これは告白と捉えられないだろうか？　しかし、ここで退く訳にもいかない。　それに俺がそう答えたからって逢がそう解釈するとは限らないからだ。
「あぁ、逢がいなかったら俺は楽しめないね。　一生いて欲しいくらいだよ。」
……？　自分で言ってなんだがこれは相当際どいラインを言ってる気がする。
俺たちの間に静寂が訪れる。　感じるのは風と俺の心臓の鼓動。
際どいセリフを言ったせいだろうか、いつも以上に激しくなっている。
そして、おかしい。　逢からの返事が来ない。
「おい、逢。　どうした？」

そして星野逢は想いを固めた

私は気づくと真っ暗な世界に居た。
ここは一体どこなのだろうか。　当然頭の中にはその疑問が浮かぶ。　さっきまで私は八幡にメールをして横になって寝ようとしていた。
ということはここが夢の中なのだろうか？　八幡が見たっていう夢の世界なのかな。　そう思うと少し嬉しい。
しかし、ここから何をすればいいのだろうか。　私の意識があって夢と気づいただけだ。　何もできない。
ただ、ここは夢の中だ。　起きようと思い瞼を開ければアクションとなる。　おそらくそこからが八幡が話していた夢の内容だろう。
『……ア！　……か？』
ふとこんな音が聞こえた。　その音に含まれているのは怒りの感情。
私に恐怖の感情が走る。　こういうとき八幡がいれば私は……とついつい思ってしまう。
夢の中であるのでさっきの怒声と私の記憶で中々結びつかない。
だからこそなおさら怖くなる。　何が起こるのだろうかと。
八幡によれば、この夢は自分の記憶にある意識していて欲しいことを夢に見るという推測らしい。　私は八幡を信じるほかない。
……なら、怖くても先に進まないとね。
私は瞼を開けた。

×　×　×

瞼を開けたらそこにはかつて見慣れた建物があった。
それはいい思い出と辛い思い出が混じり、そして私にとって大事な決断をした場所―私と八幡の中学校。
私は今校舎裏の物陰にいた。　私は状況を思い出そうとするが中々思い出せない。　……すごい大事な記憶だったのに薄れていたのを感じる。

そう思っていると私の耳に肉と肉が打ち合う音（エロい意味じゃないよ）と怒声が聞こえた。
「おい、比企谷ァ！歯を食いしばれよ！」
私はその言葉のする方へ物陰から伺うようにして見た。
そこに映っていたのはクラスメイトの男子達が八幡をいじめ……と呼ぶにはあまりにも残酷な行為をしていた事だ。
私は止めに入りたかった。　だが、動けない。　何で！　何で助けられないの！
その問いの答えは簡単に出てしまった。　この光景は私の記憶なのだ。　今私の意識はかつての私にある。　けど、今はかつての記憶が再現されている。　つまり、過去の私はここで止めに入れなかったから今の私は動きたくても動けないのだ。
私はただその光景を見ることしかできず泣いていたと思う。
その光景を見ている中で気になる台詞があった。
「おめぇみたいな害虫が星野さんに話しかけるな！　クラスの雰囲気が悪くなるし、何よりムカつくんだよ！」
「お前何か星野さんを脅してるんだろ？　そうでなきゃ彼女から話すわけないしなｗ　どうだった？　少しばかり話し相手ができた感覚はよぉ？　ギャハハハハハハハ!!!!!!」
「だまれ……、星野は何も悪くない。　全ては俺が悪いんだろ？」

こういった台詞だ。　ねぇ八幡、なんで私を責めないの？　気づいているでしょ？
クラスメイト達が飽きたのだろうか、八幡を置き去りにして去っていった。　過去の私はすぐ様八幡に駆け寄る。　多分、ここからは今の私と同じ行動を取るんだろうな……と過去にした行動をそう思った。
八幡は意識はあるようだったが危ない状態であることには変わりない。
私は救急車を呼んだ。　それくらいひどい状態だったのだ。
救急車が来るまでの間私は八幡に付き添った。　少し意識のあ

る八幡に私はこう言った。
「ごめんね、比企谷君……。　私がクラスでの比企谷君の立ち位置がかわいそうだという理由だけで話したからこういう結果になったんだよね。　やっぱり同情なんかで話しかけるからこんな事になったんだ……。　ごめん、これしか言葉が出てこないけど……ごめんなさい！　私、比企谷君を傷つけるだけだからさ、もう話しかけるのやめるよ。」
これは私の本音だった。　私の自己満足の感情から始めた行為の終点。　そして懺悔。
かつての私は八幡と居れるのが救急車が来るまでだなと思っていた。　だからこそ八幡にバレないように涙を堪えている。　救急車に乗った後一人で泣くために。
そんな私に掠れるような声で聞こえてきた。　発生主は勿論……八幡。
「まってくれ、星野……。　俺はお前が同情で話しかけてきたことを知っていた。……知っていたよ。確かに話すきっかけはそうだったかもしれない。　けどさ……、俺はお前と話すことが楽しかった。　それは俺に友達がいないからそう感じるのかもしれかい。　けど……、今俺はお前と本当の関係になりたいと思っている。　だからさそんなこと言わないでくれよ……。　もう一度、一クラスメイトとしてやり直しさせてくれないか？」
そんな言葉が八幡の口から出るなんて当時の私は勿論知らなかった。　今の私が聞いても驚くくらいだしね。
八幡はあんなにボロボロになっていて、私が同情で話しかけてきたのも知ってるのに殴ってきた人に対して私の事は何も言わなかった。
それどころか、こんなひどい私に対して絶交しろなんて言わずにやり直そうって言ってくれた。
私は最初、八幡がただかわいそうだと思っただけで話しかけた。
あんな扱いはおかしいだろうと、酷すぎると、そう思ったから。
それからも彼に話しかけた。　少しでも彼が居心地が良くなればいいなって、ただそれだけの理由。

少しの時間でも彼に話しかけた。
彼と話すと変なことは言うけど面白い話はしてくれるし、私の事をよく気遣ってくれた。主に私の立ち位置とかね。
そんな彼に私は少しずつ興味を持っていった。　気遣いでいうならば私の話している友達と同じくらい、いやそれ以上に出来ていたしなんで嫌われるんだろうとさえ思えてきた。
彼と話す少しの時間が私の中で楽しみとなっているのを私は知っていた。
最初は同情で話しかけた私はいつのまにかそんな理由関係なしに話すようになっていった。
楽しくなってきたところでこんな事件が起きた。　こんな事が起きたら私は彼から離れるしかないじゃない……。　そう思っていたのにさっきの比企谷くんの言葉。
ずるいよ、比企谷くん……。　そんなこと言われたら惹かれちゃうよ……。
私の中で彼の存在がかけがいのないものになっていくのを感じる。

……あぁ、そうか。　私、彼の事が好きになってたんだ。　彼の不器用な優しさが、大事な時の決断力が、全部が好きになってたんだ。けど、同情で始めた付き合いだから私は何もできなかった。
今彼が言った言葉で私たちの関係は言葉で表せない不思議な関係から一クラスメイトになった。
……なら、私も恋をしていいよね？
「うん、こちらこそよろしくね八幡。」
「！　ありがとう、逢。」

×　×　×

ここで私の意識は現実へと戻ります。
夢であんなに鮮明に過去の記憶を体験すると案外びっくりしますね～。　しかも、私が恋を認識するところとか今日八幡にどんな顔

して会えばいいんだよ～。
……そっか、私あの時から恋してたな。
すっきりした気持ちが私の中にあった。　気持ちの再確認も出来たし私の中の八幡の印象も整理できたし！
こんな夢を見たことだし八幡を今日も起こしに行ってあげよう。
きっとまだ寝てるんだろうな。
私は朝食を食べ学校の準備を済ませ家を出る。　……八幡の家が私と近いのを知ったのはあの頃だったな。知った時はびっくりしたけど、それ以上に八幡と気軽に会えることが嬉しかったな。
そういえば、確かに八幡の言う通りだったな。意識しておいたほうがいいものを夢に見る。　あの夢に感謝しなくちゃ、私の思いを揺らがなくしてくれたことを。
考えているうちに八幡宅に着いた。　私がドアの前に立ったら八幡が丁度ドアを開けた。　声には出さなかったが、ははは八幡!?!?って感じにきょどってたのは八幡にはナイショのはなし。
あんな夢を見たせいかいつも以上に八幡を意識していた。　私は早速夢の話を持ち出した。……まぁ、私は詳しく話せないけれども。
どうやら八幡は1年前の交通事故の記憶を夢に見たらしい。
……あの時のことは思い出すだけでも辛い。
学校に着いて他愛もない話で盛り上がっていた。　そんな時に八幡から出たある言葉。
「あぁ、逢がいなかったら俺は楽しめないね。　一生いて欲しいくらいだよ。」
他愛もない話からでたこの言葉は私を照れさせるには十分な医療を持っていた。
普段の私なら対処出来ただろう。　ただ、今の私……いや、”これからの”私は上手く返せないだろう。
あんな夢を見た後は自分の意識から常に離れないような感覚がする。　これのせいで八幡の冗談でいうこんな言葉もガチで照れてしまうのだ。　いや本当顔が熱い。　耳まで真っ赤じゃないかな？

大丈夫かな？　八幡に恥ずかしい姿見せてないかな？
「おい、逢。　どうした？」
八幡が心配している。　答えないと八幡が不審がっちゃうな。
不自然じゃないように返さないと……。
「あ、うん。　ダイジョウブダヨー。」
あ、やばい。　片言になっちゃった！
八幡がジト目で見てるよ！　……かわいいかも。って違う！どうにかしないと……。
「ラブコメの波動を感じる……！」
不意に声が聞こえる。　声のする方には昨日八幡を呼び出した教師、平塚先生の姿がそこにあった。
「ひ、平塚先生どうしたんですか？」
八幡もすごい動揺してそう。　そりゃそうだよね……。
「いや、友達いないと思ってた奴に友達がいる……と思ったらそれを越えて彼女がいるこの生徒をどうしようかと考えていてな。」
え、か、彼女って私？
思わず顔が赤くなってしまう。　そ、そりゃあ将来的にはなりたいけれども！
「いや、彼女じゃないですよ。」
「比企谷……。　いや、何も言うまい。　しかし、まさか友達が星野とはな。」
「だから言ったじゃないですか友達がいるって。　これで俺奉仕部抜けていいっすか？」
「駄目に決まってるだろ。　友達以外も色々とおかしな部分があるからな。　少し奉仕部で反省しろ。　……まぁ、友達の件は悪かった。」
あ、奉仕部抜けちゃダメなんだ。　案外厳しいんですね。
「よかったです。　じゃあ、教室行くから逢。」
「うん。」
平塚先生に礼をして脇を通り抜ける。

その際に平塚先生に「大変だと思うが頑張れ。」と言われた気がした。　気のせいかな。

しかし、今日は朝からハードだなぁ。　放課後の奉仕部大丈夫なのかな。　若干心配になってきたよ……。

そうは言いつつも八幡と過ごす日常が楽しいなぁ……といつも思う。

……八幡、大好きだよ。

そして奉仕部へと突入する。

放課後、教室にいた逢に声をかけ昨日約束した奉仕部に俺と一緒についてくるよう言った。

廊下を歩きながら、昨日逢がした発言を思い出してビクビクしながら俺は言った。

「そういえばさ、昨日ガツンと言ってやるって言ってたけどそれ本気か？」

「うん、もちろん！　・・・雪ノ下さんって怖くないよね？」

逢は即答した。　だが、やはり少し怖いらしい。

「大丈夫だ、問題ない。」

「それ、大丈夫じゃない奴だよ・・・・・・八幡。」

どうやら、ネタを知っていたらしい。　そのおかげで雪ノ下の怖さが伝わっただろう。

奉仕部の扉の前に立って俺はいったん止まり、深呼吸してノックした。

「どうぞ。」

中からは雪ノ下の声が響いた。　どうやらいるらしい。

雪ノ下雪乃は俺を見てこう発した。

「あれ、あなたは・・・・・・ひき、ひき、ひきがえるくん？」

「おい、あからさまに間違えるのはやめろ。」

「あら、ごめんなさい。　少しど忘れしてしまって。　ところで、そこの被害者は？」

「おい、俺の後ろにいるだけで被害者はさすがに酷くないですかね？」

さすがの俺も傷つく。　八幡のボロボロの段ボール製のハートにはその攻撃はつらい。

「あのう・・・・・・。」

お、逢。　言ってやれ！　さっき、廊下で話していたことを実践する時が来たぞ。

「さすがにそれはいいすぎだと思うんですけど・・・・・・。」

逢も少し引いていたらしい。　寛容な逢でもダメでしたか。

「冗談は置いといて、そこのあなたは？」

「あ、私は八幡の友達の星野逢っていいます。」

雪ノ下は聞きなれない単語を耳にしたようで困惑している。

「八幡・・・・・・？　友達・・・・・・？」

いやなんで八幡も含まれているんですかね。　もうそこには突っ込まないけど。

「昨日言ってた俺の友達だよ。　どうだ、連れてきてやったぞ。」

雪ノ下は椅子を用意してきて部屋の真ん中にあるテーブルのところに持ってきた。

「とりあえず、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「では、星野さん。　あなたのストーカーについての相談なんだけれども・・・・・・。」

「おい、ちょっと待て。　ひどくないですかね？雪ノ下。」

「別におかしくないわ。　私から見て被害にあっていると思ったのは事実だもの。」

「いや、逢は俺の友達なんだって言ってるだろ。」

ここまで来るとわざとなのか本音なのかわからない。　しかし、雪ノ下の言いたいことも分かる。　だって自分で信じられないし。

「あの！」

部屋に響く声。　その声の主はもちろん逢だった。

「八幡のことをそんな風に言うのやめてください！　八幡は私の大切な・・・・・・友達なんです。」

友達と言った時に少し陰りが見えた気がするのは気のせいだろう

か。

「・・・・・そう。　分かったわ。　申し訳ない事をしたわ、星野さん。」

思ったよりあっけない幕引きだった。雪ノ下ならもう少し食いついてくると思ったが。

奉仕部内に少しの間が生まれる。　雪ノ下は顎に手をやり、何やら考えた後こう言った。

「比企谷君、ちょっと三人分の飲み物買ってきてくれないかしら？」

本音を語り合い、そして自ら変えていく

～逢　視点～

え、雪ノ下さんとの二人きりになったけど・・・・・・。

部屋に沈黙が広がる。　さっき怒声をあげちゃったからなんか気まずいな。　八幡早く帰ってこないかな。

「ところで、」

「はい？」

驚いて少し声が裏返ってしまった。　恥ずかしい。　けど、本当にびっくりした。　いったいなんだろう。

「あなた、比企谷君の事が好きなの？」

・・・・・・ん？　会ってまだ一時間もたっていない人から聞きなれない単語が聞こえたぞ？　聞き間違いかな？

「あの、すいません。　もう一回言ってもらえないですか？　なんか聞き取れなかったようなので。」

雪ノ下さんは真面目な表情でこちらの目を見ながら言う。　その嘘偽りのない瞳からは思わず目をそらしたくなってしまう。

「星野さん。　あなたは比企谷君の事が好きなの？　私は恋愛と言うものはしたことがないからよくわからないのだけれど、私にはそう感じたわ。」

雪ノ下さんはこちらを見るのをやめない。　どうやら嘘は付けないようだ。

「バレちゃいましたか。　はい・・・・・・、私は比企谷八幡君が好きなんです。」

「そう・・・・・・。」

そういうと雪ノ下さんはこちらを見るのをやめ、本に目を移す。

え、これで終わりなの？　私の心境としてはすごい・・・・・・言葉にできない晴れ晴れとしたものがあって、ここから話題が広がるんだろうなって思っていたのに、これで終わり？

思わず聞かずにはいられなかった。

「あの、それだけですか？」

「ほかに何か言ってほしいの？」

「あ、いや・・・・・・。」

それを言われると困る。　確かに雪ノ下さんに何かを言ってほしい訳じゃないのだ。　これは私の願望。

「はぁ・・・・・・。　あのね、星野さん。　私、はっきりしないのは嫌いよ？」

何も言い返せない。　そう思われてもしょうがないだろうなと私は率直に思った。

「そろそろ比企谷君が帰って来るわね。」

その言葉は私に何を伝えたいのだろうか。　考える。　後悔しない選択を選ぼう。　もうあの時みたいになりたくない。

「雪ノ下さん！」

「はい、なにかしら。」

雪ノ下さんは極めて冷静に返答した。　今の私とは対極。　けど、自然と怒りはない。

「ここって、奉仕部って言うんですよね？　困っている人に手を差し伸べる部活って聞きました。　それで・・・・・相談いいですか？」

雪ノ下さんはそれを知っていたかのようにこちらをまた向いた。

「もちろんいいわよ。」

「相談内容は・・・・・これから八幡とどう接して行けばいいのかという事なんです。　過去に八幡に関して少しありましてその時がきっかけで八幡のことが好きになったんですけど、同時に彼の事を好きになっていいのかと思うようになってしまって・・・・・・。」

「・・・・・・。」

雪ノ下さんは黙って聞いてくれている。　そのことがただただ嬉しい。　こういった行為に会ってまだ間もない人に話せるこの人のカリスマというのを感じずにはいられない。

「私の思いは彼に対する気持ちでいっぱいなのに、過去に起こったことだけはどうしようもない！　私はどうすればいいんですか？」

雪ノ下さんは少し目をつむり、そして答えた。

「確かに難しい問題だわ。　こればっかりはあなたの問題でもあるわ。　過去に何かあったのかは知らないけれど。　あなたと比企谷君はどれくらい一緒にいるの？」

「え～と・・・・・・。　登校と下校、クラスでは一緒にいますけどあまり話していません。」

「あまり話さない？　聞いちゃいけないとは思うけど、はいかいいえで答えてほしいの。そのことは過去の事に何か関係あるのかしら？」

「・・・・・・・はい。」

「・・・・・・そう。　大体は察したわ。　あなたのその問題は確かに時間が解決する問題じゃないわ。　けれど、すぐに解決する問題でもないわ。　具体的に言うなら、この高校生活中には解決しないとダメでしょうね。」

「・・・・・・・。」

やっぱりそうなのかな。　けど、どうすればいいのかな。

「星野さん。　私から言えることは少ししかないけれど言えることわね、まず教室でもちゃんと比企谷君と会話をしなさい。　それから、学校以外でのふれあい、例えば遊びに行くとかそういったことをしなさい。恐れないで進むことが唯一の道よ。」

その言葉を他者から聞いて私の心に届くものがあったと思う。〝恐れないで進む〟・・・・・・その心が私には足りなかったのだと思う。

「ありがとうございました、雪ノ下さん。　だいぶすっきりしました。　ここからは自分で頑張って行こうと思います。」

「そう・・・・・・頑張って。　私からは何もできないから。」

雪ノ下さんはこちらを見て笑っていた。　たぶん私の顔も笑顔だと思う。

その時、扉が開いた。

「お～い、買ってきたぞ。」

八幡が飲み物を買いに行ってたのから帰ってきたらしい。

「お疲れさま。　って、またマックスコーヒー？」

まぁ、どうせそれだと思ったけど。　八幡らしいし、私はもう慣れちゃったからいいけど雪ノ下さんが・・・・・・。

「ありがたくもらっておくわ。」

若干雪ノ下さんが驚いているように見える。　ふふ、かわいいな雪ノ下さんって。

マックスコーヒーに口を付けつつ私は考えた。　これから私の過去に起きた出来事の清算をしていくんだろうと。　けど、それは嫌なことに感じなかった。　むしろ私の前に現れた蜘蛛の糸なのではな

いかとそう感じた。　私はこれからの高校生活の一分一秒を楽しみ、苦しみそして自分なりの答えを出すのでしょう。

まず、今日の下校は何を話そうかなと考え私はマックスコーヒーを飲み終えた。